



Tokachi MaaS プロジェクト実施中! 3/31 (水) まで

感染症対策と公共交通利用の
両立をめざして。

北海道では、「北海道MaaS展開事業委託業務」委託コンソーシアム（〔代表法人〕（一社）北海道開発技術センター、〔構成法人〕（株）ドーコン、（株）日本総合研究所）を実施機関として、十勝地域にお住まいの方を対象に、ウィズコロナ時代においても安心して公共交通を利用できるよう、交通機関における混雑情報の見える化やQRコード決済の導入、飲食店や病院などの目的地と公共交通をセットにしたデジタルチケットの販売など、感染症対策と公共交通利用の両立を目指す実証実験を行っています。詳しくは「十勝MaaS」で検索！



Tokachi MaaS project

公共交通を応援！お得なチケット販売！



※MaaS (Mobility as a Service) :ICTを活用し、電車、バス、タクシーなどあらゆる移動を一つのサービスとして展開するもの

【実施主体】北海道
【実施機関】「北海道MaaS展開事業委託業務」 委託コンソーシアム
【お問い合わせ】北海道総合政策部交通政策局交通企画課
TEL:011-204-5893

十勝MaaS 検索



第20回「野生生物と交通」 講演論文集販売中！

講演論文集はエコ・ネットワークで販売中(2,500円税込)。
過去の論文集は、第4号から在庫があります。
購入に関するお問合せは、下記までお願いいたします。

【エコ・ネットワーク】〒060-0809 札幌市北区北9条西4丁目エルムビル8F
TEL 011-737-7841 FAX 011-737-9606
E-mail eco@hokkai.or.jp HP http://econetwork.jp.org



編集後記

今月号のインタビュー取材で、南富良野町へ。取材にご協力いただいた「ログホテルラージュ」から見下ろす場所にかなやま湖があり、ワカサギ釣りの聖地として有名とのこと。シーズンだったこともあり、湖畔には色とりどりのテントが沢山張られていました。せっかくなので、私たち編集チームもワカサギ釣りを体験！ノースギアの坂本さんのコーディネートのもと、慣れながら、なかなかの釣果でした！至れり尽くせりのご対応で、テント内も広くて暖かな空間で快適！ワカサギ釣りは、かなやま湖のノースギアさんがおすすめです！(笑)(M.K)



どれも大き目30匹弱の釣果！天ぷらにしても水がキレイなので臭みなど全くなくとっても美味しい！

dec monthly vol.426

2021年3月1日発行

発行人 山口 登美男

編集人

発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363 FAX (011) 738-1889 URL http://www.decnec.or.jp/ E-mail dec_inh001@decnet.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2021.3.1 vol.426 デックマンスリー



- Monthly Topic (マンズリートピック)
〈寄稿〉北海道のサイクルツーリズム推進の取り組み
- dec Report (デックレポート)
■ 羊蹄ニセコエリアをサイクリストの聖地へ
～「羊蹄ニセコ自転車走行協議会」の取り組み紹介～
■ 自転車で巡ろう！遊ぼう！石狩北部と増毛！石狩北部・増毛サイクルルートの取り組み報告

dec Interview >>> 南富良野町 町長 池部 彰 氏

富良野美瑛サイクリングルートの魅力の一つは美しい湖畔沿いの道があること。かなやま湖は、冬にはわかさぎ釣りのテントの花が咲く道内有数の体験型観光のフィールドです。この湖を擁する南富良野町でアウトドア体験観光を地域づくりの中心に据えた取り組みが加速しています。陣頭指揮にあたる池部彰町長をお訪ねしました。

南富良野町は多彩なアウトドア体験が楽しめる地域として知られていますが、コロナ収束後を見越して、インバウンドを含む誘客戦略を着々と進めておられます。

私は、この町の「地の利」に大きな強みを感じています。昔は、札幌から富良野方面に入るのは旭川経由で遠いイメージが強かったのですが、JR石勝線と道東道によってアクセスは飛躍的に変わりました。わが町は「新千歳、旭川、帯広の3空港」から等距離にあり、さらに「フラノ、トマム、サホロの3リゾート」の中心に位置する、まさにダブルトライアングルの中心です。

一昨年、フィンランドエアが新千歳に新規就航しましたが、北海道がヨーロッパと直接つながりを持っているのは素晴らしいですね。新千歳から入ってくるインバウンドにとって、わが町は「日本で最も近いフラノ」ということになりました。さらに望むべくは、道東道のトマムICと占冠ICの間にスマートインターが設けられ、南富良野市街につながる道路整備ができれば、もっと訪れてもらいやす

い町になるでしょう。

もう一つのわが町の強みは、人口約2,400人の町ながら、さまざまな種目をカバーするアウトドアガイドが40人近く在住していること。この方々が生業として南富良野のアウトドアを発信してくれることは町の財産であり、これを生かさずして町の未来はないだろうと思っています。こうしたことがアウトドア体験の拠点整備を目指した「道の駅」再編事業の取り組みにつながっています。

道の駅「南ふらの」(1993年設置)は令和元年度の重点「道の駅」に選定され、2024年リニューアルオープンの予定。その周辺エリアでアウトドア愛好者垂涎の大規模な拠点施設整備が計画されています。

実は、南富良野町には「道の駅」制度ができる以前から国道38号沿いに駐車場付きの24時間トイレが設置されていました。これは衛生管理に注意を要するタネイモを生産する農家が多いため、狩勝峠越えのドライバーの不心得を防ごうという目的で町が設けたのです。その後、はまなす国体(1989年)でカヌー大会がわが町で開催されるのを契機に物産センターも整備し、1993年に道の駅「南ふらの」となりました。今では年間30万人が訪れる町最大の誘客施設で、ここを核にした国内有数のアウトドア拠点の整備計画が進んでいます。

新しい重点「道の駅」が目指すのは①シーニックバイウェイと連携し、インバウンド対応可能な観光情報発信拠点、

重点「道の駅」を核にした、
滞在型のアウトドア体験観光拠点の整備で、
観光と防災の両立を目指し、
「アウトドア観光の南富良野」に一層、
磨きをかけていきます。

dec Interview

いけば あきら

1950年南富良野町生まれ。74年北海学園大学工学部卒業。民間企業勤務を経て、75年南富良野町役場入庁(技術職)。建設課を皮切りに商工観光課長、財税課長、消防支署長などを務め、2000年町長選に出馬し、当選。現在、6期目を務める。北海道町村会副会長、上川町村会会長、(一社)全国森林レクリエーション協会理事。趣味は大学時代からのバンド活動。近年は自転車も。

②デマンドバスなどの地域の公共交通の結節拠点、③子育て世代も安心の防災拠点。アウトドアに関してはアドベンチャーツーリズムのワンストップ窓口としての機能を目指しています。

先行して来年6月オープンを目指しているのは隣接する複合施設です。すでに2018年に国内屈指のアウトドアメーカー、(株)モンベル(本社:大阪市)と包括連携協定を結んでいます。複合施設に同社による道内最大級のスペース(261坪)のアウトドアショップがオープンします。ウェアをはじめ自転車、カヌー、テントなど同社の商品のすべてが揃い、店内の一角にはクライミングピナクルの設置も予定されています。夏は施設のそばに仮設型ドーナツプールを設置してカヌー体験というのも可能でしょう。店舗をはじめとしたさまざまな事業展開に向け、社員1名が町に滞在し、携わっていただくことも計画しています。

複合施設には、この他にレストラン、フードコートを設け、アウトドア関連ではグッズのレンタルショップや自転車整備などを行うサイクル・ステーションも開設予定です。RVパークも周辺エリアに整備しますから、車中泊でゆっくりアウトドアを満喫してもらえでしょう。施設整備は、国の地方創生拠点整備交付金を活用し進めてまいります。

周辺エリアには民間投資によるホテル建設も予定されています。道の駅が通過型ではなく、滞在型の観光拠点になりそうですね。

道の駅の国道をはさんで真向かいに宿泊特化型ホテル「フェアフィールド・バイ・マリオット北海道南富良野」が来年6月開業予定です。これは国などの支援措置によらない民間の

事業連携による取り組みで、積水ハウス㈱とホテル事業のマリオット・インターナショナルが全国展開している「Trip Base 道の駅プロジェクト」で実現しました。

このプロジェクトは「道の駅」の隣接エリアにホテルをつくり、観光を起点とした地域経済の応援をしようというもので、食事や買い物は道の駅や地元商店を利用することを前提にしたシンプルなホテルが、昨年からは全国各地に誕生しつつあります。道内では恵庭市、長沼町に続く3つめの開業となる見通しで、3階建て78室の規模です。25道府県に広がっているプロジェクトには、さまざまな企業がパートナー企業として参加しており、モンベル社もその一つですが、具体的な連携例としては南富良野が全国初でしょう。

南富良野町は2016年8月の台風10号による大雨災害で、市街地を中心に甚大な浸水被害が出ました。地域づくりへの影響はいかがでしたか。

国や道からのさまざまな支援、また各地からのボランティアの方々の応援で、おかげさまで復旧は進みました。何より良かったのは、たくさんの住民がへり救助されるという深刻な水害にもかかわらず一人の死者も出なかったことです。さらに関係機関の協力で、道路の寸断で孤立した牧場の約900頭の牛も救うこともできました。

水害は大変でしたが、このピンチをチャンスに、という気持ちが強かったですね。実際、南富良野町を全国に知ってもらうこととなり、ふるさと納税の申込み者は3倍近く増え、アウトドア関連の事業などでは企業からの応援

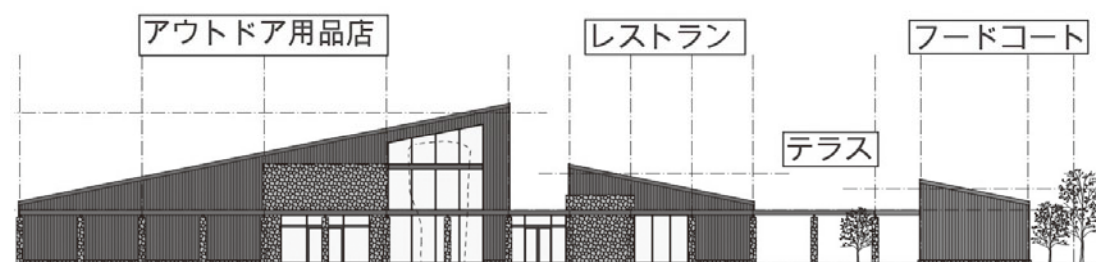
を得やすくなった面がありました。その後の防災の取り組みでは、空知川の橋の架け替えに伴い、河川防災ステーション(国交省北海道開発局)が2025年運用開始で設置される予定で、国の補助で堤防の補強も行われます。道の駅も「防災道の駅」を目指し、防災装備の充実を図ります。

観光と災害への備えを両立させることが重要だと考えていますが、その取り組みの一つが昨秋開催した「手ぶらでアウトドアキャンプ」(主催:町、NPO法人南富良野まちづくり観光協会、モンベル社などの実行委員会)です。アウトドア体験を通じて災害への対応力をつけようという趣旨のイベントで、晩秋のかなやま湖畔キャンプ場で最小減の道具でテント泊し、アウトドアの専門家やガイドの指導でサバイバル術を学んだり、ラフティングなどを楽しんでもらう内容です。家族づれなど約90名に参加いただきました。



上:サバイバル登山家服部文祥氏による焚き火実践術講習会(「手ぶらでアウトドアキャンプ」より)

下:人力移動手段としてのカヌー体験(同上)



道の駅再編整備複合施設イメージ図

アウトドアを楽しむノウハウは防災術にもつながっているんですね。南富良野町には、そうしたノウハウを持つガイドが住民として40人近くもおられて心強いことです。

町の人口比にすると1.6%です。なぜ、こんなに多くの方に住んでいただいているのか、振り返ると、端緒ははまなす国体のカヌー大会でしょうか。1989年にわが町で開催されることが決まって、長野出身でカヌーづくりに取り組む小林茂雄さん(現・NPO法人南富良野まちづくり観光協会・事務局理事)が移り住んでくれたことは幸運でした。間もなく目黒義重さん(現・NPO法人どころ野外学校理事長)が学校を開こうと移って来られました。

これが85年のことで、ちょうど道内では一村一品運動が盛んに提唱されているころでした。特産品開発がブームになっていましたが、うちの町ではモノではなくて人づくりをしようとして(南富良野は)いいんでない会」という若者交流を支援する集いをしていました。私のような役職職員や移住者も含め、町内の交流が進んだということはあるですね。

それ以降も全国からアウトドアのエキスパートが移り住んでくれましたが、その背景にはトマム、サホロ、フラノという自然体験観光のニーズのあるエリア至近で、周年で仕事をしやすいこともあるでしょう。また、町は国立公園内ではないので、厳しい規制がなく、比較的活動しやすいということもあるようです。

最後に、南富良野に生まれ育ち、長くこの地で地域づくりに専心されてきたお立場から、町への思いや地域づくりの理念についてお聞かせください。

私の中学、高校時代はちょうど金山ダム(1967年竣工)が建設されている最中でした。中空重力式構造という先駆的な型式のダムで、コンクリートが



南富良野町在住のアウトドアガイド指導によるテント設営(「手ぶらでアウトドアキャンプ」より)

打設されて巨大な建造物ができあがっていくのを見て、これからは「コンクリートの時代」だと思い、大学は工学部の土木に進学したのです。その後、「コンクリートから人へ」と言われた時代もありましたが、私は「コンクリートも人も」大事だと思っています。

役場で建設課次長になったころ、リゾート法の関連で「北海道富良野・大雪リゾート地域整備構想」が動き出しました。商工観光課が新設され、そちらに異動して大手資本のリゾート建設事業の対応に追われました。しかし、結局、バブルが弾けてストップになり、富良野や占冠のような大型開発は南富良野ではなされなかったのですが、それで良かったと思っています。

私は、現在の南富良野町の財産は森であり、山だと思うのです。かつてこの町は、まちづくりのために山の木を切って住宅や道路、畑などをつくる歴史を百年歩んできました。しかし、その次の時代は人口減少のなかで、逆に山に木を増やして自然を再生する百年であるべきだと思っています。だから「山づくりがまちづくり」を理念に掲げて2000年に町長になったのですね。

(一社)全国森林レクリエーション協会の理事や国有林のある道内市町村



冷え込む夜、かなやま湖に流れ着いた流木を活用した火起こし(同左)

でつくる有志連絡協議会(北海道森林管理局)の代表世話人をさせていただいているのですが、最近、林野庁が提唱する「森林サービス産業」という考え方に注目しています。それは森林を材木生産などの財貨的価値だけでなく、人がそれを楽しむことによって生まれる健康、観光、教育などの付加価値を重視し、山村振興に生かそうということです。国有林も含めて、きちんと自然保護をしながら森林の多様な価値を多くの人々が楽しめるようになればいいですね。



美しいかなやま湖と周辺の山々

〈取材協力〉かなやま湖ログホテル ラーチ
(南富良野町東鹿越)

かなやま湖を見下ろすカラマツ林に囲まれた閑静な佇まい。北海道産カラマツ(LARCH)材を使用した本格的ログホテル。地場の食材を豊富に盛り込んだフルコースディナーも楽しめます。



寄稿 北海道のサイクルツーリズム推進の取り組み

北海道開発局建設部道路計画課課長補佐 瀬能 博之氏

北海道は、豊かで雄大な自然環境や生産活動の中で形成された農村風景、独自の歴史・文化、多様な都市、安全で高品質な農水産物等、アジアの中でも特徴的で魅力的な観光資源が存在しています。

北海道が今後も持続的に発展していくためには、こうした強みを活かし、国内外からの来訪者の受入環境等の整備や、多様な観光メニューの充実等により、北海道の魅力をさらに磨き上げていくことが重要です。

北海道開発局と北海道および多くの関係機関が連携し、北海道の魅力的な観光資源を活かした新たな取り組みとして「サイクルツーリズム」を確立することにより、広域的な周遊観光等をより一層促進するため、安全で快適な自転車走行環境の改善、サイクリストの受入環境の充実、情報発信等の取り組みを推進しています。

背景と経緯 ～全国に先駆けて試行を開始～

2016年(平成28年)に閣議決定された第8期北海道総合開発計画において、北海道の強みである「食」と

「観光」を戦略的産業として育成し、豊富な地域資源とそれに裏打ちされたブランド力など、北海道が持つポテンシャルを最大限に発揮させることにより「世界の北海道」を目指すこととされました。

また、全国的には、2017年(平成29年)に自転車活用推進法が施行され、これに基づき策定された自転車活用推進計画では、「サイクルツーリズムの推進による観光立国の実現」に向けて取り組むことが位置づけられました。

こうした中、2017年(平成29年)に「北海道のサイクルツーリズム推進に向けた検討委員会」を設置し、アジアの中でも特徴的で魅力的な北海道の観光資源を活かしながらサイクリングを楽しめる環境を高めていくための検討に着手し、平成29～30年度の2年間、試行を実施しました。

この試行結果を活かした取り組みを本格展開するため、2019年(令和元年)に官民多くの関係者の連携・協働により北海道における世界水準のサイクリング環境の実現に向けた取り組みを推進する体制を整えました。

推進の枠組み ～北海道サイクルルート連携協議会設立と各ルートでの本格展開～

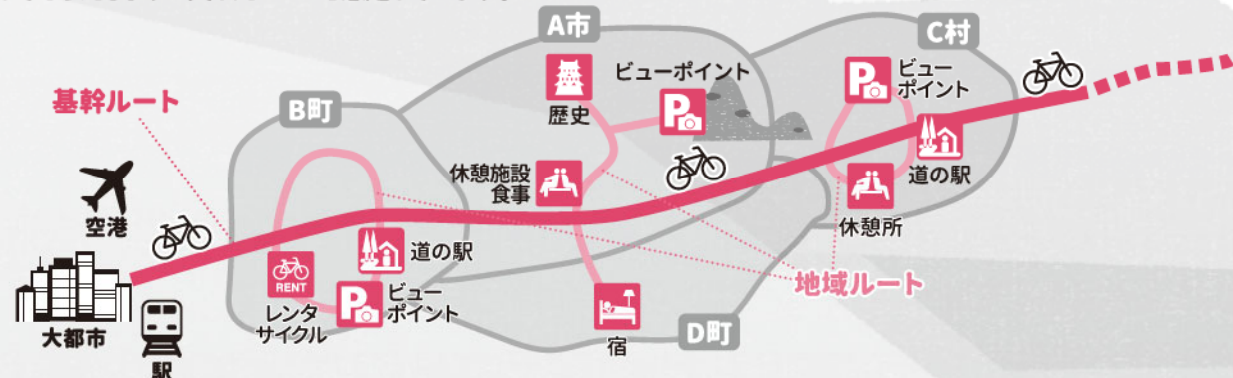
2019年(令和元年)8月、一元的な情報提供や統一的な案内を実施するとともに、全道で一体となった活動が展開できるよう、全道的な体制として多くの関係機関からなる「北海道サイクルルート連携協議会」(以下、連携協議会)を設立しました。

具体的には連携協議会において、目指す姿や具体的な取り組み方法を示す共通の指針として「北海道のサイクルツーリズム推進方針」を策定しました。また、策定した推進方針に則り、連携協議会と連携・協働して、質の高いサイクルツーリズムを提供する「ルート協議会」を募集しました。ルート協議会は、各地域の民間団体、サイクリスト、行政等により構成され、サイクルツーリズムに関する各種取り組みを実践する活動団体となります。

また、有識者による「アドバイザー会議」を設置し、各ルート協議会との意見交換や現地視察を通じて、先進的なサイクルツーリズム環境の実現に向けた広範な助言を頂いています。

北海道のサイクルツーリズムの目指す姿や具体的な取り組み方法を示す共通の指針「推進方針」

〈01:基本的な考え方〉 各地域のサイクルルートは「基幹ルート」と「地域ルート」により構成することとしました。「基幹ルート」は、広域にわたり都市間を移動する骨格となるルートであり、空港や駅、大都市と目的地を結ぶルートで、セルフガイドでの走行を想定しています。「地域ルート」は、ビューポイントや地域特有の魅力を巡るルートであり、それぞれの地域の奥深さを体感してもらえるよう工夫したコースを想定しています。



〈02:各ルート等で提供されるサービス〉

各地域において、関係機関連携のもと、走行環境の改善、受入環境の充実及び情報発信に取り組みます。



走行環境

サイクリストがセルフガイドで迷わず安心して走行できる統一的なルート案内と路面表示による安全対策を実施。

案内シールによるルートの案内



路面への通行位置明示



受入環境

わかりやすいルート案内、休憩施設を一定間隔で設置

休憩施設の一定間隔での設置



移動のサポート体制の構築

上: サイクルラックや修理工具の設置(道の駅等の立寄施設)
下: 路線バスを活用した自転車輸送

道内各地で取り組む各ルート協議会



情報発信

ルートの魅力や休憩施設等の情報発信やサイクリストからの意見を把握



スポット情報

総合的な満足度 4/5
★★★★☆
道の走りやすさ 4/5
★★★★☆

全体的に走りやすい道が多く、景色も最高でした!
評価・意見の投稿 (イメージ)



左: コミュニケーションサイト
右: サイクリングマップ(ルートの案内や周知)

現状とこれから ～世界水準のサイクリング環境の実現に向けて～

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、各ルートにおける取り組みが難しい状況でした。そうした中、各ルートにおいて、ルート案内や路面表示等の自転車走行環境の整備を着実に進めるとともに、ガイド研修やルート試走を通じた改善の検討等の受入環境の充実についても感染対策に配慮しながら工夫して取り組みを進めました。また、全ルートでの統一的なサイクリングマップの作成等についても検討を進めています。

一方、サイクリング客を受け入れるイベントは中止になったものも多くありますが、さまざまな状況のもと、工夫しながら取り組まれたものもあります。一例として、2020年(令和2年)9月に、羊蹄ニセコエリアサイクリング

トにおいて、例年実施している「羊蹄一周ワンダーサイクリング」を少人数のグループごとに別なルートを楽しむという感染対策に配慮したイベントを実施しました。

今年度の大きな動きとしては、2021年(令和3年)1月、トカプチ400がナショナルサイクルルートの候補ルートに選定されました。今後、ナショナルサイクルルート審査委員会により審査が行われることとなります。ナショナルサイクルルートは、一定の水準を満たすルートを対象として国(自転車活用推進本部(国土交通大臣))が指定するもので、日本を代表し、世界に誇りうるサイクリングルートとして国内外にPRを行い、サイクルツーリズムを強力に推進していくものです。トカプチ400がナショナルサイクルルートに指定されれば、北海道のフラッグシップとして、当該ルートのみならず

道内各地におけるサイクルツーリズムの魅力の世界に向けて発信される事が期待されます。

北海道における世界水準のサイクリング環境の実現に向けて、皆様方と一緒に乗り越えていかなければならない課題がまだまだございます。多くの関係機関や各ルートの皆様方とこれからも連携しながら、ウィズコロナ・アフターコロナを見据え、サイクルツーリズムを通じて多くの方々に北海道を訪れてもらえるよう、今後も引き続き、積極的に取り組みを進めていきたいと思っております。





羊蹄ニセコエリアをサイクリストの聖地へ ～「羊蹄ニセコ自転車走行協議会」の取り組み紹介～

羊蹄ニセコ自転車走行協議会 会長 脇山 潤氏

サイクリストの聖地を目指した羊蹄ニセコ自転車走行協議会のサイクルツーリズムの取り組みについてご紹介します。

羊蹄ニセコ自転車走行協議会(以下、YNCA)は、平成30年に、羊蹄山麓7町村(倶知安町 京極町 喜茂別町 真狩村 留寿都村 ニセコ町 蘭越町)の行政と民間が一体となり、エリアのサイクリング環境を整備し、多くのサイクリストに訪れ滞在して頂くことで、地域を活性化することを目指し組織されました。

YNCAを構成するのは、Nisekoリゾートエリアの中核をなし、宿泊施設やアクティビティフィールドを有す「倶知安町」と「ニセコ町」、良質な温泉が自慢の「蘭越町」、花と田園風景の「真狩村」、このエリアもう一つのリゾートを有し、洞爺湖にも近い「留寿都村」、羊蹄エリアの札幌からの玄関口「喜茂別町」、そして湧水の里「京極町」の7町村です。

羊蹄山(蝦夷富士)をぐるりと取り囲む7町村を走るサイクリングコースは、湧水を汲める場所や道の駅、美味しいお店といった、数々のお勧めの休憩スポットが要所にあり、小学生から上級者まで楽しむことができます。

安全で快適な自転車走行環境の実現と受入環境の充実を目指して

YNCAは、道路行政と連携して夏期に使われていない除雪ステーションを活用しサイクリストが利用できるサイクルステーションの整備・運営に取り組んだり、地域のお勧めのルートに案内看板を設置するなど、ハード整備に取り組んでいます。また、道路行政が道路上に青い矢羽の誘導サインを設置する際に、サイクリストの目線で必要箇所の抽出に協力をしています。



除雪ステーションを活用したサイクルステーション

また、ソフト事業として、サイクリングツアーガイドを養成するJCTA(日本サイクルツーリズム推進協会)のガイド講習会を受講し、安全で楽しいガイドサイクリングの技術を身につけ、習得したガイド技術を活用し、羊蹄一周を楽しむワンダーサイクリングというサイクルイベントを企画・運営



JCTAのサイクリングツアーガイド講習会の様子

しています。さらに、サイクリストの走行環境を整えるために道路管理者と協働で道路の草刈りや清掃活動に取り組むなど、幅広い活動に取り組んでいます。また、サイクリスト向けのサイトを開設し、羊蹄ニセコエリアのお勧めルートや道路状況、サイクルフレンドリーな宿やお店、サイクルイベントなどの情報を発信するなど、この地を訪れるサイクリストのコミュニケーションの場を運営しています。



道路管理者と協働で取り組んでいる道路の草刈りや清掃活動

一人でも多くのサイクリストが羊蹄ニセコエリアを訪れ、サイクリングやイベントへの参加を楽しんでいただくため、今後もYNCAはサイクルツーリズムを推進する活動に積極的に取り組んでいきます。

自転車で巡ろう!遊ぼう!石狩北部と増毛! 石狩北部・増毛サイクルルートの取り組み報告

石狩市 企画経済部 企画課 交通担当 上窪 健一氏

石狩市、当別町、新篠津村及び増毛町の4市町村で連携するサイクルツーリズムによる広域観光の取り組みについてご紹介します。

サイクルツーリズムによる広域観光

石狩市、当別町、新篠津村及び増毛町の4市町村が連携して、「石狩北部・増毛サイクルツーリズム推進協議会」(事務局:石狩市)を組織しています。石狩北部地域と増毛町の特徴的で魅力的な観光資源を活かしながら、サイクルツーリズムの振興による広域的な周遊観光等の地域振興を実現すべく、「北海道サイクルルート連携協議会」の策定した「北海道のサイクルツーリズム推進方針」に則り、令和元年度にサイクルルートマップを作成しました。作成したマップは、それぞれの市町村ホームページで公開しておりましたが、地域を訪れる観光客に向け、積極的にアピールするため、令和2年度からは市町村役場をはじめ、道の駅、観光案内所などで配布を始めました。

サイクルラックなどの環境整備やプロモーション動画による情報発信

協議会は、サイクリングを通じた観光活性化や国内外からの観光客誘致を目的に、平成30年に発足しました。サイクリングガイド、シーニックパイウェイ支援センターに参画いただき、安全で快適なサイクリングが楽しめる環境整備や情報発信などの取り組みを進めております。令和元年度には、道の駅や観光施設にサイクルラックや工具を整備したほか、令和2年度には、プロモーション動画を作成し、国内外に向けて、さらなる地域の魅力発信に努めています。

4市町村をぐるっと巡るサイクリングコースと地域のおすすめ周遊コース

「広域コース」は、なんと総距離約290kmです。海や川など水を感じながら走るエリア、森や田園風景、歴史的建造物を眺めながら走るエリアなど、季節によっても様々な風景を楽しむことができる魅力的なコースです。距離が長いので、何日かで分けて走るのもおすすめです。また、それぞれのまちをいいとこどりして巡る「各地域のコース」は、10kmくらいから100km未満のコースまであり、各地域の特徴がちりばめられているので、食も体験メニューも様々楽しめます。

「自転車+α」で何ができるか、自分で工夫してみるのも面白いかもしれません。各地域のコース概要や詳細、その他の地域コースは、マップ内のQRコードからご確認いただけます。

自転車通行空間の整備

サイクルルートにおいて自転車が安全で快適に走行できる環境を整備するため、北海道開発局や北海道などと連携して、案内標識と路面表示の設置を行っております。案内標識などの設置により、道に迷わず、安全で快適に走行できるようになることから、より多くのサイクリストの方々に来て頂きたいと考えております。引き続き、石狩北部地域と増毛町の雄大な景観と魅力的で豊富な地域資源を活かして、広域的なサイクルツーリズムをさらに推進することにより、石狩北部地域と増毛町の観光を活性化していきたいと思っております。



森や田園風景を眺めながらの走行